
ファンタジーワールド

kazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーワールド

【Nコード】

N2315M

【作者名】

k a z u

【あらすじ】

魔法が発達している世界。

この世界では誰もが魔法を使い、人々は魔法をいろいろな形で利用してきた。仕事、建築、移動、機械、勉強、政治、国交、戦争など・

そんな世界の中でのんびりすごしていた勝俣、しかし体育祭中に出会った少女によってその日常が変わってゆく。

1 - 1 体育祭へむけて

ここは、東にある島国『ニッポニア』。

その国の大都市『トキオ』にある超名門学校・・・の隣にある落ちこぼれ校の生徒である勝俣翔はいつものように学校の屋上で授業をサボっていた。今の学校の制度は七歳から12年間の義務教育を一つの校舎で行うのである、勝俣は今年9年生だ。勝俣は6年生くらいまで授業を受けていたがある理由により段々授業を受けなくなり、最終的にはまったく授業を受けなくなった。

その理由というのは勝俣の力にあった。5年生から魔法の授業を受けるようになってから、魔力のコントロールの練習が始まった。だが勝俣は自分をもつ膨大な魔力をコントロールすることができず、暴走して校舎を半壊させることもあった。それから教師たちから嫌な視線を浴びみんなから軽蔑されはじめた、いわゆる落ちこぼれだ。だがそんな勝俣でも参加しないとならない時がある。

「かつちゃんいるー？」

屋上の扉が音を立てて開いた。勝俣が見るとそこには女の子の姿があった、だが女の子と呼ぶのは容姿だけであって本当は勝俣と同年である。彼女は短い髪に小さな背、そしてメリハリのない胴体、顔立ちは整っている。美少女というよりは美少女といったかんじだ。「今年もうちのチームにはいつてくれるよね？」

チームというのは体育祭のことである。競技はたったの一種目、だが内容が濃い、一日中魔法を使った合戦を行い範囲はトキオの一部をつかつかかなりの広さで行っている。

「ああ、構わないよ」

彼女、『嵐山カナ』はこんな落ちこぼれの俺にも声をかけてくれる。

「かつちゃんがいれば百人力だよー」

「期待するなよ、いつ暴走するかわからないぞ」

「それじゃあ、またね」

カナは機嫌よく立ち去っていった。

1 - 2 もう一人の訪問者

その日の昼休み。

二人目の訪問者がやってきた。

「勝俣！いるんでしょ！」

大声で屋上にあがってくる女の影、彼女は『御手洗美香』という。
一応幼馴染なのだが勝俣はこの反転属性付き勝気娘は少し苦手である。

「あんた少しくらい授業でなさいよね！」

「なんでお前に言われなきゃいけないーんだよ」

「学級委員長だからよ」

「ええ！」

衝撃の一言。普段からあまりクラスに顔を出さない勝俣はそんなことは知らないのであった。

「あんたがちゃんとしないと私が怒られるのよ！」

「あつそ」

「あつそ、じゃないわよ！……それと……」

「なんだ？」

「あの……その……体育祭……あんたのことだからまだチーム決まっていなくてしょ……だから……その……私のチームに入らない？」

「それならさつきさつそでもらったから大丈夫だよ」

「え……そう！別にあんたなんかいなくても勝てるから平気なんだけどつ！！あんたのチームなんか一瞬で藻屑にしてやるんだから！！」

「藻屑つて……」

「それじゃはいはい！！！！」

後ろから見ても怒りが伝わってくるようなオーラを出してさっさと帰っていった。

1 - 3 体育祭当日

勝俣はいつものようにサボり続けていたらいつのまにか体育祭が来てしまった。

「第96回体育祭を行う。体育祭の本来の・・・」

校長の長つたらしい話を聞き続けること20分ようやくルール説明に入った。ルールは単純なものでこの東京ドームの5個分はあるだろうこの区域の範囲で7〜9年生の間で行い、ある装備が配られる。それは魔法による一定のダメージを受けると反応が消えて戦闘不能とみなされる。戦闘不能となったものは校舎に転送されてテレビ画面で体育祭を見学するというあまり易しくないルールとなっている。

「それでは、これから体育祭を執り行う。今から10分後の合図でスタートだ。」

その声がかかるとみんなぞろぞろと自分たちの陣地へ向かって行く。「かつちゃんも早く来てね。」

嵐山は飛翔魔法で飛んでいつてしまった。残念ながら勝俣は飛べないので歩いていくことにする。

「なんだあれは？」

大きな魔法球が空に向かって飛んでゆく、そして強い光を出しながら四散する。開始の合図みたいだ。すでにいたところで戦闘が起こっているに違いない、勝俣も先を急ぐ。

「おい、勝俣。」

「なに？忙しいんだけど。」

「いそがしいじゃねえよ！お前みたいな雑魚をおれが学校に帰して

やろうつてんだ。」

敵兵Aはオレンジ色の魔法球を勝俣に飛ばしてくるが、木の陰に隠れて身を守る、事はできなかった。

（何故だ！あの大きさの魔法球ならここまでの威力は出ないはず・・・）

「俺の魔法に驚いたか、なんたつて質が違うからなあ」

「質？」

「そうかお前は知らねえか。質つてのは魔力の純度のことさ、質が高いと弱い魔力でも強い破壊力になるのさ」

「なるほど勉強になったよ」

「俺は純度を上げるための膨大な集中力をこの二年で身につけた。二年間サボり続けたお前とは差がひろがり過ぎたんだよ！」

「そうか・・・」

「もう消えな。」

敵兵Aはさつきよりも大きな魔法球を全力で勝俣に飛ばしてくる。

「僕も二年間何もしてなかった訳じゃないよ。」

勝俣は腕を振ってその魔法球をはじいた、ように相手からは見えただろう。実際には一瞬魔力を放出して、その衝撃波で魔法球を四散させたのだ。

「なっ」

敵兵Aはなにがおきたか理解できずにいる。

「お前の二年と僕の二年では質がちがったんだよ」

勝俣は拳に魔力を集中させて相手の顔面にパンチを入れた。

『魔法による一定のダメージを確認。転送します。』

敵は飛ばされていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315m/>

ファンタジーワールド

2010年12月29日22時02分発行